

## わたしの目指す看護師像

私には忘れられない患者さんがいる。あの時のあの笑顔は、実習に悩む私を今でも支え続けてくれている。誤嚥性肺炎のため入院されていたその A 氏（90 歳代）は、BMI もアルブミン値も低値であった。看護師たちは食べる必要性を説明しながら食事介助をするも、「もういらん」「冷たいが嫌やちゃ」と拒否し、毎回食事摂取量は 1～2 割程度であった。この状態が続けばいずれ経口摂取以外の方法の検討は避けられず、ご家族も心配しておられた。

私は A 氏に食事介助の援助を実施した。看護師の食事介助でさえ食べないのに、学生の私が介助したところで何も変わらないかもしれない。それでも A 氏に少しでも食べてもらいたいという思いだけは強かったからだ。

私はまず、食事前に嚥下体操を行った。必死だった私はどんな顔をしていたのだろう。A 氏は「おかしな顔をして」と私の顔を見て笑った。私も笑った。

誤嚥性肺炎であった A 氏は、嚥下食でペースト状の食事形態であった。はっきり言って何が何なのか、メニュー表を見てもその色で判断するしかなかった。私は「はい、どうぞ」と言って食事介助を始めた。口を開けて食べてくれたが、次の一口が開かない。私だったら何を食べているのかもわからない食事なんて楽しくない。「鮭のムニエルですよ。鮭の美味しい季節になりましたね」・・・「あらそうけ」と口を開けた。私はこの時何かを感じた。「次はオクラのおかか和えです。少し冷たいですよ」冷たいものを嫌がる A 氏は、いつも口に入れられてから冷たいとわかるという食事を余儀なくされていた。私だったらそんなの騙されたようで不愉快だ。「少し冷たいけど、オクラのネバネバパワーはすごいんですよ」と、今思えば看護学生とは思えない低レベルの声かけであったが、嫌がっていた A 氏は口を開けてくれた。私は嬉しくてたまらなかった。

しかし、やはり冷たいものは嫌だったようで、次は温かいおかゆですよと声をかけても口を開けてくれなかった。そこで私は A 氏の手におかゆの入った食器をあてた。「ほら、温かいでしょ」と。A 氏は口を開けてくれた。このやりとりを何度も何度も繰り返し、気付けば食事は全量摂取となった。いつも 1～2 割程度しか食べなかった A 氏が全部食べられたのだ。私は嬉しくて、A 氏に「お食事全部食べられましたよ！」と伝えた。「あら～ほんまけ」A 氏は驚きながらも嬉しそうだった。顔がほっこりとしわくちやになっていた。

私はこの経験から、患者さんの立場に立つことが、患者さんに寄り添うことの第一歩だと学んだ。つつい看護者側の思いで声をかけたり介助してしまいがちになるが、誰のための何のための援助であるのか、何を一番に優先すべきなのか、私は A 氏の笑顔を忘れず、患者さんの気持ちを大切にできる看護師になりたい。